

【報告】

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用共同研究課題「負債の動態に関する比較民族誌的研究(2)―人間経済における負債の多元性, 相克, 創造性」2023年度第1回研究会(通算第4回目)

日時:

開催日: 2023年7月9日(日) 10:00~17:40

場所:

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 303 室、オンライン会議室

プログラム:

10:00-10:30 全員

報告と打ち合わせ

10:30-12:00 酒向溪一郎(AA 研共同研究員, 立命館大学大学院)

「奴隷として生きる、貴族として見守る: 東スンバの社会階層を事例に、フィールド報告を交えて」

13:00-14:30 深田淳太郎(AA 研共同研究員, 三重大学)

貝貨の「死蔵」は主権なき「徴税」か?

14:30-16:00 佐久間寛(AA 研共同研究員, 明治大学)

「人間経済とはなにか: 贈与、負債、モラル」

16:10-17:40 全員

総合討論

司会: 佐久間寛(AA 研共同研究員, 明治大学)

参加者: 21 名

概要:

2023 年度第 1 回研究会を上記の日時およびスケジュールのもと実施し、21 名が参加した。本研究会ではまずインドネシア・東スンバ島において調査中の酒向が、現地社会における「奴隷／貴族」関係についての報告を行った。次に深田の報告では、パプアニューギニア・トーライ社会の伝統的貝貨について、とくにその葬送儀礼における垂直的な関係性をつくる働きに着目した分析が行われた。最後に佐久間がこれまでの研究会の中心テーマである「人間経済」概念について今一度整理を行い、そこから参加者全員で 2024 年度科研費申請に向けたアイディア出しを行った。司会は佐久間と橋爪が務めた。各報告の概要は下記の通りである。

最後に、次回研究会は 11 月を目処とし、当研究課題の成果論集『負債と信用の人類学』(以文社)の合評会と共同開催することを決定した。

(文責 橋爪)

奴隷として生きる、貴族として見守る——東スンバの社会階層を事例に、フィールド報告を交えて

酒向溪一郎(AA 研共同研究員, 立命館大学大学院)

グレーバーは『負債論』[2016]のなかで「人間経済」から「商業経済」への移行に際して、人格が剥奪され「数値化され代替可能なもの」として扱われる人間を「奴隷」と呼んだ。報告者の調査地であるスンバ島の東スンバ社会では、現在に至るまで社会階層が維持されている。この社会階層のなかでもアタと呼ばれる人々は、従来の民族誌では「奴隷」として訳されることが多い人々であった。この点を踏まえ本発表では、ひとまず先行研究にならないアタたちを「奴隷」とみなしたうえで、調査地において奴隷の人々がいかなる存在であるか、という点をグレーバーの『負債論』における議論、および調査地において奴隷たちと彼らを従える貴族たちとの関係を手掛かりとして検討した。

前半では、先行研究および調査集落を含めた東スンバ社会における社会階層について中心的に整理した。後半では、慣習的な儀礼および日々の生活において奴隷の人々が貴族からどのように扱われているのか、あるいは貴族たちに対してどのような振る舞いや態度を示すのかという点について紹介をした。各事例を通じてアタの人々は、先行研究が指摘する通り「社会的に死んだ」存在 [パターソン 2001] であるだけでなく、ときに人格化された存在であるような扱いを受けており、この点から彼らを、「人格化されているが、人に所有される人間」と言えるのではないかと指摘した。最後に、従来の奴隷(制)に関する研究が、西欧中心な文脈のなかで議論されてきた可能性を指摘し、この視点から抜け出るうえで上述の新たな視点から東スンバの社会階層を今一度再検討する必要があるのではないかと結論づけた。

(文責 酒向)

貝貨の「死蔵」は主権なき「徴税」か？

深田淳太郎(AA 研共同研究員, 三重大学)

パプアニューギニア、トーライ社会における貝殻貨幣タブがいかに価値がある貨幣として存在しているのかという問いに対し、貨幣の水平的な交換・循環および相対的な関係の中における位置としての価値という側面と、貨幣がそれ自体として他との関係に依らない、いわば人々の上にあらかじめ権威として垂直的な存在するという二つの側面の関係について考察をおこなった。

この関心自体は当研究会での前回の発表と同じだが、前回は「原初的負債論」(アグリエッタ & オルレアン 2012『貨幣主権論』; テレー 2021『社会的事実としての貨幣』)のアイデアと、それと対立するD・グレーバー(2011『負債論』ほか)の議論の関係から考察を行ったのに対し、今回は現代貨幣理論(MMT)において貨幣の存立・価値の源泉を国家による徴税に見るという議論を援用してトーライ社会における「垂直的」な権威の成立と解体について中心的に考察した。

トーライ人は貝貨タブを、日常的なモノの売買や婚資の支払いその他、さまざまなかたちで

「水平的」に交換し、相互のあいだに関係性を作り出す。ここでは人も貝貨もあくまでも、他の要素との相対的な関係において意味、価値を与えられている。一方で、タブを大量に蓄積し車輪状に束ねたロロイと呼ばれる形態は、それ自体として危険なあるいは聖なる（いずれも現地語では”tabu”）力をもつものとされる。いわば垂直的価値である。

前回の発表では、「原初的負債論」を援用し、トーライ社会の諸儀礼において中心的な価値を体現するこのロロイという権威に対して、人々が「生の負債」を負っていると考えた。この見立てには一定程度の妥当性はあったものの、グレーバーが批判したように、「権威」が一つしかない「世界」に人間は暮らしていないというのはトーライ人も同様であり、この点については修正が必要であった。また生の負債を「支払い」が具体的にいかになされるのかを明確にすることもできなかった。

本発表では、このロロイという中心への「支払い」を、人々が意図的に行うものとしてではなく、潜在的な徴税と捉える視点を導入した。上述の水平的な交換は、互酬的なものであり、互いに貝貨を「与える」「助ける」ことは、トーライ人にとっては義務のようなものである。一方ロロイを作るということは、人に与えないで貯め込むことである。ロロイは、本来ならば水平的な交換で周囲の人々に与えられたはずの貝貨を「与えないこと」によって出来ている。これを潜在的な徴税と捉えることで、ロロイを垂直的な権威・中心とする再分配構造が、特定の中心による意図的な収奪によるものではなく日常的な微細なやり取りの結果として、しかも単一の中心ではなくロロイの所有者の数だけ、さらに固定的ではなくあくまでも「潜在的」な形で作りだされるメカニズムを明らかにすることができた。

(文責 深田)

人間経済とは何か—負債、貨幣、労働—

佐久間寛(AA 研共同研究員, 明治大学)

本報告では、今後の研究会の方向性を探るべく、「人間経済」についての概念的整理を試みた。まず、本研究会の学術的背景として、冷戦崩壊後に進展した「市場経済」をめぐる諸問題を確認し、次いで、これらの諸問題によって提起されているのは、「市場にかわる経済システムとは何か」という問いであることを指摘した。この難問に対する一つの回答が社会主義的な計画経済であったのに対し、それとも異なる第三の領域に属する思潮のひとつが「人間経済」である。本報告ではその源流としてマルセル・モースとカール・ポランニーの思想に着目し、その後彼らの思想を継承する形で展開したK・ハートらの編著『人間経済(The human Economy)』(2010年)の議論と、D・グレーバーが『負債論』(2011年)のなかで打ち出した人間経済論の意義を確認した上で、これらの研究をポスト・コロナの2020年代にふさわしいかたちで再構想する必要性を提唱した。

参加メンバーからは、ポスト・コロナという時代性の設定が研究内容と齟齬をきたしているとの指摘や、人類学的には目新しいのかも知れないが経済思想的には見慣れたテーマにすぎない

のではないかという指摘がよせられた。これらの意見をふまえて箕曲氏より、追求すべきはむしろ現行の「人間以後の人間」をめぐる理論潮流——非人間論、分人論、人新世論など——のなかに人間経済論を位置づけなおす作業であること、すなわち「ポストヒューマンの人間経済」論なのではないかという卓越した見解が寄せられた。

(文責 佐久間)